



私の平和



小城ゆり子

(1) 青春の夢

始めは平和のための運動だった。それが、いつのまにか、社会主義の運動になってしまった。一九六〇年代に学生時代を送った私の夢。

学生運動に参加したのも、始めは、核実験がほんとうに怖かったのだ。その頃、ソ連とアメリカとが核実験競争をやっていた。放射能で身体が冒される、それが怖くて、平和運動をやっていた。

一触即発の核戦争。キューバ危機があり、ベトナム戦争があった。いつも緊張の連続で、いつ人類滅亡戦争があるか、わからない。綱渡りのような平和。それでも、平和であることに変わりはないが。

平和を求める反核運動をしていて、私は社会主義者の仲間と出会った。それは、当然の帰結だった。私の父親がマルクス主義者だったのだ。小さい時、父親は私にソ連という国のすばらしさを教えた。これからはロシア語を学ぶといい。ロシア語を学べば、きっと将来いいことがある。父は私にそう教えた。

いいことなんか、何もなかった。

親孝行の娘は、父親の言いつけ通り、大学はロシア語科に進み、社会科学研究会に入り、自治会活動をし、孤独を知った。

社会主義活動をしたいという気持を、人々にわかってもらえない。学友たちと気持を共有できない。一握りの活動家だけで、まあ、サークル活動である。

文学をめざそうと思った。この自分の気持を小説に書きたい。なぜ自分が社会主義をめざすのか、それを書きたい。書いて、気持を皆と共有したい。プロレタリア文学をめざしたい。

それを言ったら、活動家仲間に非難された。あなたは文学のことも社会主義のことも、真剣に考えていない。プロレタリア文学なんて、スターリン主義の幻影だ。政治活動しても皆がついてこないから、小説を書きたいなんて、政治の代わりに書きたいなんて、逃げている。書きたいなら、政治活動と文学と両方やるべきだ、政治から逃げてはいけない。

活動家たちは、私一人でも活動から離れる者がいると数が少なくなって困るから、政治活動をしるしろと言う。要するに、一人でも戦列から離れる者がいると困るから、そう言うのだ。そして、私の悩みには誰も答えてくれなかった。一般の人々から離れてしまう、孤立の悩み……その孤独感に答えを与えてくれなかった。この人たちは、自分自身は孤独を感じていなかったのだろうか？ 今となっては、わからない。ただ想像するだけである。

脅かす者もいた。反体制文学を書ける者は、自分がどれだけ反体制運動に取り組んでいるかによって、書けるか書けないか決まるのだ。自分が真剣に反体制運動に参加していなければ優れた文学は書けないのだ、と私を脅迫する。

もっと酷いのは、文学など何の価値もない、文化運動などバカらしい、それがやりたいというなら俺を説得してみろ、といったものだ。

文学音痴。

プロレタリア文学は、古いか？

人は、何か人々に訴えたくて書くのではないか？

私の気持ちをわかってほしい……と思った。私の気持って、いったいなんだったろう？ 社会主義を夢見る気持。そんなもの、わかってどうするというのだろう？

社会主義の夢は、挫折した。ソ連の崩壊とともに。

ソ連を真の社会主義の国と信じていたわけではない。あれはスターリン主義である、真の社会主義は別にある、とっていた。それでも、ソ連の崩壊と共に、社会主義の夢は挫折した。

マルクス主義は科学ではなかった。夢であった。

夢を実現しようとすれば、数々の無理が生じる。現在の中国のように。それでも、人々は昔から理想の桃源郷を求めてきた。理想を求めるから社会が進歩した。いつか、マルクス主義思想も無駄ではなかったといわれる日が来るのかもしれない。

それでも私は急進主義者であったから、当時の平和な生活を唾棄すべきもの、とっていた。大江健三郎の「われらの時代」に書かれている、平和で、のんびんだらりとして、生命の躍動のない時代。唾棄すべき日常生活。

外側では、高度成長社会だった。どんどん経済発展する。資本主義の全盛時代。革命など、夢のまた夢。

何も知らない平和の申し子たちは、自分たちの夢が遠いと、文句を言っていた。それが爆発したのは、一九六八年頃の学園闘争である。私は、このときにはもう大学を卒業していた。

その後、反戦青年委員会などに所属して、活動したりしたが、これはなくてもいいものだった。過激なデモを繰り返して、党派闘争にあけくれる。反戦平和などは名前ばかりである。でも、過激な運動は、麻薬のような作用を持つ。戦争のことも平和のことも、問題の社会主義のことも、何もわかっていないくせに、麻薬をかがされたように、デモをする。悪夢のような日々であった。

私の気持ちをわかってほしい。今もそう思う。

私の気持など、どうでもいいのだ。日常が平和であれば、戦争がなければ、どうでもいいのだ。国境の無人島がどこの国のものになっても、戦争がなければいいのだ。

私の気持ちをわかってほしい。この世が、平和であってほしい。その気持ちをわかってほしい。

いや、私の気持などどうでもいい。とにかく、現在の平和で幸福な生活が続きさえすればいい。

。

(2) 小説教室

私はカルチャーセンターに通っている。小説教室とユーモア文芸教室である。それぞれ二週間に一回ずつある。

十二月二十日は、小説教室の打ち上げの日だった。打ち上げというのは、十月から十二月までカルチャーセンターの十月期が終わったので——いつも三ヵ月ずつの学期に分かれているのだ——その終わりの日に、皆で居酒屋へ行くのだ。私は大して酒は飲まないで、居酒屋も大して興味がない。でも、行き掛かり上、行くわけだ。

こんなことを書いて、小説教室の皆に見せたら、まずいかな。カルチャーセンターに行く人たちは、余裕のある人たちなのだ。その日の糧に困っている人たちは、カルチャーセンターなどに来ない。私は夫の年金で暮らしていて、カルチャーセンターの費用は夫のお金から出すのは申しわけないから、自分の国民年金から出している。別に夫がそう要求しているわけではないが、自分でそうしている。講座料と打ち上げの費用。国民年金が少ないから、もったいないと思うのかもしれない。

そこで今回の打ち上げ。三時に教室が終わり、その後、ロビーで紅茶を飲む。ティーブレイクで、私はいつもレモンティーを注文する。別に深い理由はない。お茶菓子を持ってきてくれる人もいる。私は、自分の書いた小説を合評してもらったときとか、旅行に行ってお土産を買ってきたときとかは、お茶菓子を持参するが、ふだんは持ってこない。糖尿病が怖いから、お菓子は自分では買わない主義なのだ。でも、人のくれたものは食べる。小説教室のある日だけでなく、いつも食べてしまう。で、ダイエットは成功しない。

レモンティーを飲みながら、しばし歓談する。

先生に聞いてみる。

「私、かねがね不思議に思っていることがあるんですけど」

先生はプロの文芸評論家である。

「鎖国は幕府が決めたことなのに、なんで開国に朝廷の勅許が必要だったんですか？ いらないじゃないですか、そんなもの」

「だって、幕府は朝廷の任命した征夷大將軍が開いたものだから」

「でも、鎖国は一方的にやったんですよね。幕末には、幕府の力が相対的に弱くなっていったからってことですか？」

「そう」

「水戸史学があったから？」

「そうです。水戸黄門が水戸史学を作ったからです。水戸は御三家の中では石高が少なく、紀州や尾張に対抗するにはイデオロギーで対抗するしかなかったんです」

「そのイデオロギーは日本が戦争に負けるまで続いたんですよね」

水戸史学。万世一系の天皇の世。君が代の思想。今も、続いているのだろうか？

「攘夷ってどこから来た思想ですか？」

「中国にあったんですよ」

「お金ってどこにあるんでしょう？」と光子が言う。

「お金がなくて困っているってみんな言うけれど、じゃあお金ってどこにあるんでしょう？」

「お金持ちが持っているのです」と私。

「そう？ でもお金持ちって大勢いるの？」

「いいえ、ごくわずかでしょう」

「わずかなら多くのお金はどこにあるんでしょう？」

「老人が持っているのです」

「老人が？ そう、おれおれ詐欺で何百万円も騙し取られたとかいうけれど、どうして何百万円も持っているのかしら？」

「高度成長社会で、その頃現役だった人たちがモーレツに働いて、いっぱい給料をもらい、老後の資金にしようとして貯めこんだのです。今は高度成長社会は終わっているから、今現役の人たちは貯められないけれど、昔は貯められたのです。その人たちが老人になって、貯金をいっぱい持っているのです。貯金はタンスの中にあるか、銀行にあるか、どっちかにあるわけです」

「でも、そういう人たちだけでないでしょう。生活だけでいっぱいいっぱいだったら、おれおれ詐欺が来ても、振り込めないじゃない。なんで振り込めるの？」

「何百万も持っていないなくても、何十万でも何万でも、持っている限り、息子や孫のためにはほいほい出すのです」

「五万しかなかったら、生活費だけで、出せないじゃない」

「でも、日本の多くの老人は、お金を持っているんですねえ。だからおれおれ詐欺が成立するわけ。香川さんは、息子さんいる？」

「娘しかいないけれど」

「そう？ よかったわねえ。まだ娘を騙ったおれおれ詐欺はないから。みんな、息子を騙っているのね。お孫さんはいるじゃない？ お孫さんを騙った詐欺犯に騙されないよう、気をつけたほうがいいですよ」

「大丈夫よ。私はそんなにお金を持っていないから」

彼女は私に聞く。「あなたはお金、持っているの？」

「私もそんなに持ってないけれど、うちにはおれおれ詐欺は来ないの。来ても、息子はすぐ近くにいて、お金のいるときは自分で来るから、へんな電話が来たら、お前、なんで自分でうちに来ないのって言えばいいのよ。おれおれ詐欺は来ないけれど、資産形成しませんかって電話はやたらに来るわね。資産形成、資産運用、銀行でも証券会社でもない、聞いたこともない零細企業から、そういう電話がかかってくるの。いつも断っているけれど、うるさいくらい来るわね」

しかし、私は恵まれているのかもしれない。

さて、五時に打ち上げを始めて、しばし歓談して、八時近くになった。千葉市の美浜区から来ているのは、私と、香川光子、橋田理子の三人である。理子のご主人が車で迎えに来てくれるというので、私と光子とはそれに便乗させてもらう。八時近くに、宴会はお開きになった。その後、先生たちは喫茶店に行くのだが、私たち三人は先に帰らしてもらう。

カルチャーセンターの前に行き、理子の車を待つ。車がひっきりなしに来る。私にはどの車か

区別もつかなかったが、さすがに理子は夫の運転する車をすぐに見つけた。うちまでバスと電車を乗り継いで行けば、約一時間かかるところだが、橋田家の車に便乗させてもらって、すぐにうちに着いた。

うちの団地の角で、下ろしてもらおう。

「じゃあね、よいお年をお迎えください」と挨拶して、うちへ入る。

「ただいま」

夫がお風呂を沸かしておいてくれた。

私は夜更かしはしないことにしているので、お風呂に入って、寝に着く。

(3) 海岸の団地

私の住んでいる団地は、千葉市の美浜区にある。ここは四十五年ほど前に海を埋め立てて作った土地で、団地ができたのも古い。昔はここは海岸だった。海浜ニュータウンといえば聞こえはいいが、津波が来たらおしまいである。東日本大震災でも、液状化の被害にあった。

以前、私たちは新潟から引っ越してきてから、習志野市の職員住宅に住んでいた。父がその私立高校の教師をしていたからである。

私が電車の中で新しい団地の広告を見つけた。父母に言うと、ぜひそこを買おうということになって、母と私とで抽選会に行った。バス停のすぐ近くの一戸を申し込み、当てた。

団地は半分だけできていた。そのできている分のモデルルームを見に行った。3Kの狭い部屋だが、当時は住宅難であったから、それだけでも新鮮に思えた。モデルルームは洋式トイレだった。が、今度できる分は、和式トイレだという。母は洋式にしてほしいと言ったが、それはかなえられなかった。今では考えられない話である。現在ではマンションは洋式になっている。老人たちは、旅行に行くと、パーキングエリアのトイレが和式だと困るという。年をとると、しゃがんで用を足すのが困難になるのだ。昔、老人たちはいったいどうしていたのだろうか？ 私たちは、住み始めてから、洋式トイレに改造した。

バス停のすぐそばだから便利、と思ったのだが、何年か後にこの団地内を走るバスは廃止になった。

旧バス停のそばに団地の駐車場がある。その右隣に公園がある。二十年ほど前、公園を小さくして駐車場を広げようとしたとき、母がブツブツ言った。

「あたしは、公園の近くだからということで、ここを買ったんだよ」

母に言わせると、買ったときの計画では駐車場はなく、すべて公園の用地だったという。これは、母の記憶違いである。

駐車場が足りなくて、十年以上前、二階建の駐車場を作った。それまでは、私たちも駐車場の抽選になかなか当選しなくて、車の置き場に困っていた。二階建の駐車場ができて、どうやらおさまったが、今は高齢者が増えたのと若者が車離れしたのとで、駐車場の空きもある。

バスは、近くのバス停まで歩いていかなければならなくなった。稲毛駅まで歩いて二十分、バスなら五分である。途中、坂を上がらなければならないので、歩いて行くのは老人にはきつい。坂のところは、二十年ほど前に、陸橋ができた。車なら陸橋で、歩くなら橋の下の階段を上る。

昔の海岸のあったところは、国道が通っている。稲毛駅に行く陸橋は、この国道をまたいで通るのである。

私たちの団地は、埋立地に最初にできた団地である。四階建ての鉄筋コンクリート、二十八棟ある。戸数にすれば五百二十八戸。今は空き家も多い。昔は、皆、抽選でやっと買ったのだ。作ったのは、県の住宅供給公社である。何しろ住宅難であったから、家族で住むという証明がたたなければ、買えなかった。ここを買って社宅にしようとする会社は、社員の名でなければ買えなかった。当時は皆、ずっとここに住むつもりで買ったのだ。だが、長い年月の間には、転勤その他の理由で引っ越していく人も多かった。引っ越していく人たちは、家を人に貸すか、売るかし

ていくので、新しく買う人も、借りる人も多かった。

最初からここに住んでいた人たちは、高齢化して、亡くなる場合も多く、今は大半が後から引っ越して来た人たちである。誰も住んでいない空き家も多い。空き家でも、固定資産税はかかるし、管理組合に管理費と修繕積み立て金は払わねばならない。まあ、一月に二万円かかるというところか。それでも、売りもせず、人に貸しもせず、空き家にしておく人が少なからずいる。賃貸はどうか知らないが、買い手は多いのだ。不動産屋の広告にある。息子が結婚するから買いたいとか、高齢の親をそばに呼びたいから買いたいとか、様々な事情で自家のほかにもう一軒買いたい人が多いのだ。値段は安い。安いから売らないのだろうか？ よくわからない。

私の母も、娘の私のためにもう一軒を買った。昔、父母と私と三人でこの団地に住んでいた。私は三人姉妹の次女だが、この団地に移ってきたとき、姉はとうに嫁いでいた。妹は、東京都下の音大に在学して、そちらの方に下宿していた。私だけが父母の許に残っていたのだ。何年かたって、妹が卒業し、私は船橋市の公立中学の教師になっていたのだから、市川市に母が小さなマンションの一室を買った。私と妹とが住むためである。このときもまだ住宅難が続いていて、母は、住宅金融公庫に、姉妹と一緒に住むためなら住宅ローンは貸せない、夫婦でなければダメ、姉妹はいずれ離れるものだから、と言われ、有り金全部出して買ったのだ。母が勤めていた公立高校を定年退職した、その退職金があった。そして私はしばらく妹と暮らしていたが、病氣療養のため、父母の許に帰ってきた。それが何年か後に結婚することになり、埼玉県の彼の許に嫁いだ。その半年後、母がそばに来てくれたら面倒をみてやるからというので、彼と共にこの団地に帰ってきた。母が団地の他の一室を買ってくれたのだ。買ってくれたといっても、半額は私の退職金を出したのだが。

こうして私たち一家は、父母とともに同じ団地に暮らすことになり、最初は確かにいろいろ母の世話になったが、後半は私が老いた両親の世話をすることになった。

父は脳梗塞になった。母はガンになった。両親の介護をするのは、大変だった。特に父の場合、脳梗塞で寝たきりになり、最後は認知症気味になったのである。当時、介護保険は、まだなかった。

それでも、私が介護疲れで鬼になる前に、父は肺炎で亡くなった。幸いだったというべきか。まだ私には余裕があった。これが十年も二十年も続いたら、どうなったか。そのとき、父の死を望む親不幸娘にならなかったという自信はない。

母は、末期ガンになるまで元気だった。団地の老人たちと親しくし、老人クラブを作ったりした。老人クラブ「友の会」である。当初は団地内で随分活躍していた。だが、父が亡くなり、母が亡くなり、次々と主要メンバーの死が続いた。結局、解散してしまい、自治会内の老人会に発展的解消をした。

父と母とは、長い間、共働きをしてきた教師同士だった。そして、母は遺産を遺した。父は遺さなかった。父が死んだとき、団地内の家と貯金が八十万円だけあった。姉妹で話し合っ、父のものはすべて母に相続させようということになった。といっても、家だけである。葬儀費用は八十万円ではまかなえなかった。

父は生前言っていた。「葬式の費用を遺すなんて、ばからしいことだ」

「お金があれば、介護が必要になったときに使えるじゃない」と私は言ったが、

「おれは妻子を養って来たんだ」そうである。

父は宵越しの金は持たない主義だった。ある金は、全部使ってしまう。これといってぜいたくをするわけではないが、貯金をしようとしないので、お金は全部毎日の生活に消えていく。老後の年金は、酒代になった。毎日のように酒屋に電話して、高価な酒を買う。そして朝、酒を飲み、昼に酒を飲み、夜に酒を飲み、寝てから深夜、起きて酒を飲む。日本酒に焼酎、ビール、ウィスキー、ワイン、何でも飲む。浴びるように酒を飲んだので、脳梗塞になったのだろうか？ わからない。脳梗塞になってからは、酒がまずい、と言ってあまり飲まなくなった。

とにかく、父はお金を遺さなかった。宵越しの金は持たないのは、長女である姉もそうで、彼女も、ある金は全部使ってしまう。これといってぜいたくをするのではなく、貯金する習慣がなく、毎日の生活にだらだら金を使うのだ。これは性格なので、批判しても、直らない。姉に言わせると、「お金を貯めても、あの世に持っていけるわけでない」そうだ。

その点、母はしっかりしていた。母が亡くなったとき、父から譲り受けた家と、私たち一家が住んでいる家と、当時妹一家が住んでいた市川市の家と、軽井沢に別荘があった。預貯金は一千万円近くあった。

介護したのは私だから、と姉妹が認めてくれたので、私が団地内の家二軒もらい、妹が市川の家をもらい、姉が別荘をもらった。預貯金は平等に分けた。姉は、あっという間にその多額のお金を使ってしまったが。生活費を夫からもらわずに自分のお金で出し、全部使ったのだ。

「それでは離婚もできないじゃない」と私が言うと、

「うん。主人にぴったりついているから」と答える。

私が自費出版したのを、「ばかな」と姉は言う。

「だってママのお金をそういう風に使ったのよ。お姉ちゃんみたいにだらだら生活費にしたわけでないんだから」

「まあ、それは私よりもいいけれどね」

私は生活を切り詰めてきたわけではないが、預貯金はできるだけしてきた。夫は中小企業に勤めていたが、何しろ高度成長社会だったから、給料はよかった。私は、夫の給料で生活して、自分がパートなどで稼いだ金はそっくり貯金した。貯金は、夫の名義と私の名義の半々にした。預貯金などは、しようと思って貯めなければ、貯まらない。夫が定年退職してからは、預貯金を少しずつ取り崩して生活している。といっても、始めの十年間は、個人年金があった。十年たって、十年確定の個人年金が終わり、あと終身の分が一つだけになったので、しぶしぶ預貯金をおろしているのだ。

(4) 旅行のあれこれ

最近、夫と二人で日本各地を旅行する。

以前は、旅行ができなかった。私は精神的な病気があって、夜眠れないと苦しい。旅行先で夜眠れないと、どうしていいかわからなくなる。それが不安で、泊りがけの旅行に行けず、もっぱら日帰り旅行ばかりだった。日帰りのバス旅行から、一泊旅行へ、その自信がついたら二泊三日の旅行へ、となってきた。夜はたいていなら眠れるようになった。旅行先で眠れなくなったことは、今のところ、ない。旅行の前日に眠れなかったことはあるが。眠れないときは、布団の中でじっとしていることができるようになった。病気になると、眠れないのが苦しくて、じっとしていることができなくなるのだが。

それでも、二泊三日しかできない。なんでできないかという、私は薬の副作用でひどい便秘症なのだ。昔は便秘はなかったが。今は、下剤を飲んで、やっと通じをつけている。でも、下剤のせいで、下痢になりがち。うまくいかないのだ。それで、旅行先で、特にバスの中などで下痢をすると困る。旅行のときは、下剤を飲まないようにしている。それで便秘。便秘のまま平気なのは、三日が限度なので、三日しか旅行できない。そのため、海外旅行はできない。

小説教室の仲間、木下友子は、よく海外旅行に行っている。つい最近も、チェコに行ってきた。ヨーロッパが好きなのだ。

「ご主人と行くの？」

「うん、主人は行かないの。娘と行くの」

「今のうちだものね」

「そう。そのうち、行けなくなるから」

友子は私より十歳年上で、もう七十代も後半である。年をとって身体が不自由になったら、旅行などできない。

「今のうちに行くのね。いいわね、海外に行けて。私は国内にしか行けない」

「海外にも行けばいいのに」

「それは、ちょっと事情があって、できないのよ」

「英語がペラペラなのに」

「私、英語はできないわよ。英語から離れてもう三十年もたつもの」

昔は英語教師などしていたが、もともと会話は苦手であった。

一月末に安芸の宮島へ行くツアーに申し込んでいた。広島まで新幹線で行って、宮島、萩、津和野とバスで回るツアーである。代金は暮れまでに払わないといけない。

十二月二十日過ぎにこのK旅行社に電話してみた。

「このツアーは出発確定していますか？」

申し込み人数が少ないと、ツアーは中止になるのだ。

「いえ、今のところ、確定していません。中止になるなら、一月八日に中止に決定します」

「一月八日ですか。そうすると、その前にお金を払わないといけませんね。年末は何日まで営業していますか？」

「二十八日までです」

「二十八日だと、すぐに郵便局が閉まってしまいますね」

「二十五日とか二十六日、二十七日あたりにお電話いただければ」

「そうですか」

しかし、二十七日に電話してまだ確定していないと言われても、中止になるのは一月八日なのだから、やはり年内にお金を払いに行かなければならないだろう、と考えた。それで、毎日予定が詰まっていたので、早々と十二月十八日に郵便局に行って、郵便振替で代金を払って来た。それが、郵便局で機械払いするつもりだったのに、ちょうど機械が壊れていて、修理中だった。郵便貯金からお金を下ろして、振替をしなければならない。窓口の手作業でやってもらうしかない。

「印鑑を持ってこなかったんですけれど、通帳と暗証番号でお金、引き出せますか？」と聞くと、郵便局員は、それでも出せるという。

大勢人が待っていて、機械故障のため、局員が慣れぬ手作業をしていて、時間がかかる。ひどく待たされた。やっとやってもらえたが――。

二十五日に旅行社から電話がかかって来た。

「実は、この旅行はキャンセルになりました」

「ええっ、お金は払ったんですよ」

「すみません、他の旅行に振り替えるか、お返しするかします。一月十四日に飛行機で同じ方面に行くツアーがありますが」

「一月十四日は都合が悪くて」

「では、お返しします。通帳番号など教えてください」

しかたなく、私の通帳番号を教える。

そばにいた夫が、「手数料も払ったんだぞと言え」と要求する。私は、夫と違うので、郵便局に払った手数料のことは言わなかった。

後で夫がぐずぐず言う。「なんで手数料のことを言わなかったんだ」

「手数料は三百十五円だから」

「三百十五円だって、もったいないだろ。だいたい、なんでそんなに早く金を払ったんだ。今日まで待てばよかったのに」

私はお金を早く払ったら、旅行が確定するような気がしていたのだ。読みが浅かった。

私たちの一月の旅行は中止なのか。私が他の旅行社のパンフレットを出したら、

「これはどうだ？」と夫が言う。H旅行社の飛行機で往復する旅、やはり安芸の宮島、萩、津和野へ行く旅行がある。二月である。

「この方がいいだろ。広島平和記念公園見学も入っているし」

「飛行機なのね」

「おれは飛行機にいっぱい乗っている。飛行機は安全だ。広島まで新幹線で行くなんて、どだい、無理なのだ。何時間もかかるぞ」

飛行機には、前に四国に行くとき、初めて乗った。でも、飛行機は事故が怖い。新幹線がぜっ

たい安全とはいえないが。

だいたい、私たちは、電車やバスで行けるところは、行きつくしたのだ。あとは、沖縄とか北海道とか、飛行機で行く旅しか残っていない。

H旅行社に電話した。

「二月二十三日出発のツアーは確定していますか？」

「はい。確定しておりますし、お席もまだ空いてございます」

「じゃあ、それでお願いします」

「宮島のお宿は、海側のお部屋がよろしいですか？ それだと、お一人様二千五百円割り増しになります」

「海側でなくていいです」

予約した。お金は、K旅行社から返してもらうお金を振り向ければいい。

この秋には、九月に伊勢神宮に行った。一日目は外宮、二日目は内宮に参拝した。あと、二見浦の夫婦岩を見て、内宮のおはらい町を散策し、松阪へ向った。松阪城址はどうってことなかった。御城番屋敷はまあまあだったが。この旅行で一番印象に残ったのは、夫婦岩か。大きな岩と小さな岩とを縄で結んで夫婦を表す。写真に撮った。この岩のように、夫は大きく、妻は小さいのか？ 縄で結んでも、ほどけてしまわないか？ いろいろと疑問に思った。

伊勢神宮は、外宮も内宮も太古の昔のわらぶき小屋みたいで、囲いで囲ってあって、中を見せてくれない。二十年毎に遷宮するそうで、来年は遷宮の年、現在はその工事中だというのが。もっと中を見せてくれたらいいのに、と夫がブツブツ文句を言う。伊勢神宮も一度行けばいい。

十一月末には、香嵐溪と京都、奈良へ、紅葉を見に行った。香嵐溪は東海地方随一の名所だが、名古屋に住んでいる姉も行ったことがないそうだ。谷川を挟んで赤や黄色の紅葉が並んでいて、圧巻だった。ただし、この日は雨が降っていた。バスで移動して伊賀上野に泊まる。わざわざ遠くまでバスで行って、どこも見ず、ホテルに泊まるだけ。ちょっとつまらない。

二日目はホテルを出て、京都へ行く。東福寺の通天橋から見る紅葉は絶景だった。これだけで来たかいたがあった。あと、南禅寺、永観堂、哲学の道を散策して法然院、真如堂へ行く。哲学の道を歩くのは大変だった。風情を楽しむというより、足が痛くて、散々だった。遊歩道としては確かに美しかったが。

夕方は、嵐山へ行く。嵐山は桜のときに来た。紅葉の山は見ごたえあったが、人の波が多くて、人を見に来たようなものだ。食事する店がいっぱいある。自由に食事できればいいのに、指定されたレストランで、「手作り豆腐」玉手御膳というのを食べる。手作り豆腐は、豆乳を火にかけて豆腐にして食べる。うまく豆腐にならなくて、残念だった。夜、バスで大阪に行き、大阪市内のホテルに泊まる。紅葉の季節は、京都の宿はとれないのかもしれない。

三日目は、大阪から奈良へ行く。奈良公園で、二時間散策する。東大寺に修学旅行の中学生たちが来ていて、にぎやかだった。鹿はかわいいが、人が鹿せんべいを買って食べさせたら、その人のところに寄ってきて、離れない。少し怖いと思った。そこからバスで延々と行き、談山神社へ、またまたバスで遠くまで行って、室生寺へ。バスも大変だが、歩くのも大変だった。バスを降りてから山道を歩いて、神社、お寺に行く。京都は市内に寺や神社があったが、奈良は郊外

まで延々と行かなければならない。不便な所にある。

夜、またバスで名古屋駅へ行く。道が渋滞していると、新幹線の指定車に乗り遅れてしまうとか。ひやひやしたが、どうやら間に合った。

新幹線こだま号。各駅に止まり、各駅でひかり号とのぞみ号とをやり過ごす。五分ずつ止まっているのだ。うんざりした。車内販売は来ないし。オプションのお弁当を頼んでいて、よかった。

そのまま東京駅まで行かず、品川駅で途中下車する。品川から総武・横須賀線に乗って、稲毛駅へ。東京駅からなら腰掛けられないのだが、品川からなので、席があった。私は老人なので、親切な人にめぐり合えれば、席を譲ってもらえるのだが、総武線の快速列車は、これがなかなか難しい。疲れたサラリーマンが多いのだ。

稲毛駅からタクシーで家に帰った。バスもまだ出ていたが、実はバス停の所が工事中で、団地まで歩くのが遠回りになってしまうのだ。

京都で八橋を買った。小説教室とユーモア文芸教室の人たちにお土産として。ユーモア文芸教室の人たちは、この春から夏にかけて、私たち夫婦が一月おきに旅行して、そのたびにお土産のお菓子を買ってきたので、「毎月旅行に行きますね」と感心する。秋には、二回しか行かなかったが。それに、十二月はどこにも行かなかったし、一月の旅行予定は前述の通り、キャンセルになって、二月に繰り延べになった。何か毎月行かないと、ユーモアの人たちに言われそう。

(5) 買い物難民

バス停の所、今、工事中である。以前はここにAスーパーがあった。品揃えのよいスーパーで、私たちは喜んで利用していた。それが、閉店になった。建物が老朽化して、よくないので、店も閉めるという。

昔、ここには商店街があったのだ。野菜も、肉も、魚も、その他一般食品も、商店街で買えたのだ。それがBスーパーが進出してきて、壊された。商店街の跡地にはマンションができた。そのBスーパーも閉鎖され、やれやれと思ったら、違うAスーパーができた。そして十年間ほど、ここは買い物に不便はなかったのだが、Aスーパーも閉鎖されたのだ。

その跡地は、長い間、放りっぱなしになっていたが、一年ほど前に、老人ホームに生まれ変わることになった。四階建ての建物を今建設中で、二階以上は有料老人ホーム、一階は診療所と店舗になるとかいう計画なのだが、問題の店舗、大家がいろいろな店にあたったが、どの店も入ってくれないとかいう話である。ここで営業してもはやらないのだろうか？

もう一つ、困ったことがあって、陸橋の脇に数年前にショッピングセンターができたのだが、そのショッピングセンターも閉鎖になるというのだ。陸橋の東側がプラザA、西側がプラザBといって、スーパーやドラッグストア、ホームセンター等々があった。十五分歩いて行けば買い物できるから、まあ便利だったのだが、そこも閉鎖になるという噂を聞いた。

それは噂の段階だったが、つい先日、プラザBのホームセンターから閉店のお知らせが来た。一月末で閉店するという。

プラザAはどうかと思って、ドラッグストアに聞いてみたら、ここは三月末でやはり閉店するそうだ。プラザAの横にあるコンビニも閉店するのだろうか？ 私たちはいったいどこで買い物をすればいいのだろうか？

二十分歩いていけば、他のショッピングセンターはあることはある。駅までバスで行けば、駅前に大きなスーパーはある。しかし、そこまで毎日歩いて行くのは大変ではないか。

私は、Aスーパーが閉店したときに、生協に入った。生協が毎週月曜日に品物を宅配してくれる。配達料の入っている分、高めだが、便利なので、利用している。

始め、夫が生協なんてと怒った。「生協なんて、素人の集まりだ」というのだ。夫は、以前、繊維関係の会社に勤めていて、その頃、商売上で生協とうまくいかなかったのかもしれない。何かよくわからないが、とにかく夫は生協が嫌いだ。だから長く入らなかったのだが、Aスーパーが閉店になったときは、生協に入りますからねと宣言して、入った。

しかし、一週間分の買い物をまとめてするのは、けっこう大変なのだ。予測のつかないことが多くて、週のうち、一度か二度は陸橋脇のショッピングセンターに行っていた。そこも閉店になるから、後はどうすればいいか？

どうすればいいって、バスか徒歩で遠くのスーパーに行くしかないのだが。

なぜ人口が増えたのに、店が閉まって不便になるのか？ 理解に苦しむ。

私たちの団地は、高齢化して、人口が減っているのかもしれない。しかし、その周辺にいくつもマンションができて、若い人たちが入居しているのだ。人口は増えている。廃校寸前だった小

学校も、新入生が多く来て、にぎやかになった。商店だけが減っている。

陸橋脇の土地は、もともとマンション群ができるはずだったので、新しい団地ができるのかもしれない。土地所有者としては、はやらない(?) ショッピングセンターにしておくよりは、マンション群を建てた方が効率いいのかもしれない。しかし、団地のようなものばかりできて、商店がなくては、入居者が困るではないか。それとも新しい団地ができたときには、商店もできるのだろうか? 早くそうなってほしい。

(6) ユーモア文芸教室

カルチャーセンターは、千葉駅から歩いて十五分のホテルの五階にある。数年前、五行歌の講座をここで受けた。五行歌というのは、その名の通り、五行で書く詩のことである。当時のメル友が、紹介してくれた。講座はどこにあるか、五行歌の事務局に問い合わせたら、千葉のカルチャーセンターでやっているというので、そこに登録した。講師は女性で、五行歌の会の会員であった。何年かそこで詩を作っていたが、限界を感じて止めた。

このセンターに小説教室もあると知って、そこに入会した。小説は、以前から書いていた。自分たちの書いた作品を、コピーして配り、合評する。私も、この教室のおかげで少し作品がうまく書けるようになったと思う。

もうちょっとカルチャーセンター通いを重ねようかなと思って、ユーモア文芸教室にも入った。ここの講師は、漫才作家の五十嵐浩氏である。会員は二十名近くいる。先生が課題を出して、それにそって川柳、狂歌、都々逸、コント、その他ユーモア文芸を作る。ここにも私は何年かいるので、いくつか、ユーモア文芸を作った。たとえば、

川柳、字結び「一」

「一」の字の入った川柳
一に金 二にイケメンで 高望み

コント「ものを手でかきませながら」

何かを手でかきませながら何かつぶやく
小麦粉に卵を加えて、と、天ぷらの衣を作ってるんだけど、あ、天ぷらの実がなかったわ。

ときは付け「心安らぐ時とは」

偶数月の十五日、通帳に年金が振り込まれた時
アラフォーになってやっと結婚できた時

「十年後をのぞく望遠鏡を見て」

ここに十年後が見える望遠鏡がある。これをのぞいて、何が見えるか言ってみよう。
あ、これが最新式の車ね。乗ると自動で安全運転するから、運転免許がいらないのね。

などである。

課題は二週間前に宿題として出されてものと、十二分間の猶予でその場で作る席題とがる。そして、前の時間に提出した作品から先生がコピーしてきてくれて、その中からいいと思ったものをそれぞれ互選する。互選で一番点の多かったものが天、次が地、その次が人、となり、先生から褒美のチョコがもらえる。それが、なかなかチョコがもらえないのだ。

楽しみはユーモア文芸のチョコレート

という川柳も作った。

ユーモア文芸教室も、三ヶ月の学期の終わりに、打ち上げがある。この方は、小説のときとは違う居酒屋で、趣向をこらしたユーモア大会がある。会員は、主婦と定年退職した男性たちで、ほとんど男女半々である。じゃんけんなどでそれぞれペアになったりして、楽しむ。

幹事の土田幸助が、私に「ゆきやこんこ」の歌を英訳して来てくれと頼んだ。

「英語は得意じゃないの。もう三十年も英語から離れているんだから」

「そんなこと言わないで。昔とった杵柄でしょ」

断りきれなくて、家で辞書を引き引きやってみた。

Snow is falling, bits of ice are falling,
heavily, heavily, lying down.
Mountains and fields are in brides' veils,
All the dead trees are flowering beautifully.

Snow is falling, bits of ice are falling,
heavily, heavily, nonstop falling.
Dogs are happily running in the garden,
Cats are curling into a ball on the kotatsu.

英訳 小城ゆり子

こたつは、kotatsu でいいだろう。英米にはないものだから。

十二月の第四金曜日、暮れの押し詰まった二十八日であるが、恒例の打ち上げがあった。で、そこで発表する。

ところが、土田幸助が模造紙に書いてきてくれたのだが、途中三行目の後半とと四行目の前半とが抜け落ちていて、不完全なのだ。

「土田さん、これでは 山も野原も花が咲く になってしまっているわよ」

「ええっ、あ、そうかあ」

土田は頭を搔く。

「ごめん、ごめん、ぼくが悪かった」

「ま、いいわよ。私は覚えているから」

立って朗読する。抜け落ちているところは、さすがにつっかえた。

そして、みんなで歌いながら踊る。

雪やこんこ、あられやこんこ

降っては降っては ずんずん積もる
山も野原も綿帽子かぶり
枯れ木残らず花が咲く

雪やこんこ、あられやこんこ
降っても降っても まだ降り止まず
犬は喜び庭駆け回り
猫はこたつで丸くなる

文部省唱歌より

その後、また別のゲームをして遊ぶ。

六時にお開きになった。二次会は、カラオケであるが、いつも私はここで帰ることにしている

。

「年末だもの、ゆり子さんもカラオケに行こうよ」と先生が誘ってくれたが、私は早く家に帰りたい。

「早く家に帰らないと、パートナーが猫に引かれちゃうの」

「あ、白粉をした猫だね」

「そう」

夫が白粉をした猫に引かれる可能性はないが、私は健康上、夜更かしはしないことにしているのだ。

(7) ドコモ

私は携帯電話を持たずにきた。家にいる主婦で、電話は家の電話があれば足りるから、というのがその理由だったが、外出したときは困った。友達との待ち合わせに携帯電話があれば便利だし、どこかへ電話しようにも最近は公衆電話が少ないし、携帯もないと不便である。友達に「ゆり子さんも携帯を持って」と言われた。

息子はずっと前から携帯を持っていて、この頃は家の電話をなくし、携帯だけですべての用を足している。夫は、始め携帯にあこがれて持ったが、何の用もないので、廃止した。だが、夫の兄姉が病気になったりして、私はゴルフに外出ばかりしている夫に連絡できなくて、「携帯電話を持ってください」と頼んだ。「女房に持たされた」と夫は言っている。兄姉の安否や健康も一段落し、携帯も活躍しなくなったが、夫が持っていれば便利なのだ。いつでも連絡できる——ところが、私が用があって連絡すると、携帯の電源が入っていない。または、夫は携帯を家に置いて、持たずに出かけている。これでは何のために電話料金を払っているのか、わからない。

私の携帯は、この夏に買った。スマートフォンが普及したので、携帯電話ではなく、スマートフォンを買おうかと思ったのだ。スマートフォンの講習会にも行った。しかし、夫が「スマートフォンで何をするんだ？」と言う。息子も、「パソコンでやればいいのに、スマートフォンなんてバケット料が高いよ」「一月に何万円もするよ」と脅かす。「たいていのことは、携帯でやれるよ」とも言われ、携帯を買うことにした。

ドコモショップの場所を聞き、そちらへ歩いていったら、ドコモとAUの看板の出ている店があった。実はそこはドコモショップではなく、ただドコモを売っているだけだったのだが、それがわからず、その店で買った。夫の携帯もドコモなので、これとの間は無料に設定してもらった。

お伊勢参りの旅行で、夫が携帯で写真を撮ってくれた。私の携帯でも撮れないだろうか？ 取り扱い説明書を読むと、マイクロSDカードというのを入れると、撮影した写真を印刷できるらしい。それで購入した店に行って、それを入れてほしいと頼んだら、

「うちにはありません」と言われた。

「ないって……じゃあ、どこに行けばあるの？」

「電器店とか、ドコモショップとか」

「ええっ？ ここ、ドコモショップじゃないの？」

「ちがうんですね」

「じゃあ、ドコモショップってどこにあるの？」

「この道をもっと歩いて行った先にあります」

「あ、そう」

しばらく歩いて行ったら、大きな店があった。ここがドコモショップだ。

店に入ったが、窓口がいっぱいあって、どの窓口も人でいっぱいだ。どこに並んでいいか、わからない。うろうろして、受付みたいなのがあったので、聞いてみた。

「あの、マイクロSDカードを入れてほしいんですが」

「ご購入ですか？」

「はい」

「ご購入は一番か二番の窓口です。受付カードをお持ちですか？」

「いいえ、まだ、わからなくて」

「では、これをどうぞ」

と、カードを渡してくれた。

「番号の表示が出ましたら、その窓口にお出でください」

番号の表示が出るまで、随分待たされた。

やっと順番が来た。

代金は、マイショップ登録すると、安くなるという。

「いつもこの店をご利用になりますか？」

「はい」

登録してもらって、カードの入れ方を教わった。携帯からカードを引き出して写真店に持っていけばいいのだという。しかし、先に、私は夫の携帯を丸ごと写真店に持って行って、写真店にみんなやってもらったのだ。難しいことは覚えられない。

「説明書ってありますか？」

「説明者は、携帯をお買いになったとき、受け取られませんでしたか？」

「ああ、あれに書いてあるの」

私は、機械の説明書とか、保険の約款とか、パソコンの同意書とか、難しくて苦手なのだ。

ともあれ、カードを入れてもらって、家に持ち帰った。

これで私もやっと人並みになったぞ、とルンルン気分だった。

ところが、災害時の緊急連絡の方法がわからない。九月一日は防災の日で、緊急連絡の練習ができるとドコモからメールがあったので、担当に電話して聞いてみた。そのときはわかったが、やはり覚えられない。どうやったら夫の携帯に私の無事を知らせられるか？

しばらく後に、地震があった。すは一大事と、夫の携帯に連絡しようとしたが、できない。

緊急時に連絡できないではしょうがないではないか。

それでも、まあ、地震のことなど忘れて、携帯を万歩計代わりに使っていた。ときどき、ドコモからメールが来る。あと、夫と息子に電話番号を教えた。他の人にはまだ教えていないから、メールも来ないはず……と思っていたら、メールが来た。

またドコモかと思って開いたら、さあ、大変。

「Hしたい女の子を紹介します」などという迷惑メールだった。あきれて、削除した。

またまた迷惑メールが来る。

「開いちゃったらダメじゃないか」と夫が言う。

「だって……」

また削除する。

その夜は、メールが来ないように電源を切っておいた。

そうしたら、朝、電源を入れたとたんに「メール受信」になって、なんと三十件もメールが

来た。

「迷惑メールが来て困るのよ。どうすればいい？」

「ドコモに行くんだな」

「ドコモに行けば来ないようにしてくれるの？」

なんだかわからない。

削除したら、次の日は四十件も来た。

息子に電話してみた。

「ねえ、携帯の迷惑メールってどうすれば来なくなるの？」

「一度開くと、次からどんどん来るようになるんだよ」

「だって、これではせっかく携帯を買ったのに、いざというときに使えないじゃない」

「後で行って見てやるよ。メールが来ても、削除しないで、ほおっておいて。ぼくが行ってなんとかしてやるから」

しばらくして、息子が来て、ドコモに電話していた。何をやりとりしているのかわからなかったが、息子があれこれ聞いている。やっと終わって、

「あ、フィルターしてないんだ」と言う。

「フィルターって何？」

「ドコモショップでこれを買うときにしてくれなかった？」

「買った所、ドコモショップじゃないの」

「普通はしてくれるんだけどね」

「そんなこと、わからなくて」

「ま、いいよ。今、しておくから」

と息子がフィルターを設定してくれた。

「これで今四十件入っているから、増えるかどうか見ていて。フィルターしてもダメだったら、一件一件ブロックしていくか、あるいは自分の指定した相手からしか受信できないようにするかしかないんだ」

「四十件もブロックするの、大変ね」

「それがどんどん増えて、八十件とか百件とかになるんだよ」

「どうしてそうなるの？ メールよこす人は一人でしょう？」

「そいつが何十件もアドレスをもっているんだ。一日中、そればかりやっているんだ。何百件もやって、そのうちの1%でも当たったら、商売になるんだ。それで食べているんだよ」

「そういうのお金になるの？」

「うん」

「人に迷惑をかけて、よく平気でいられるね？」

「お母さん、それは広告チラシと同じだよ。人の郵便受けにどんどんチラシを入れて、広告しまくっているのと同じ」

「チラシはゴミに棄てればいいじゃない」

「ゴミ袋だってただじゃないだろ。人に金を使わせて、迷惑をかけて。それと同じことだよ」

「ふうん」

「とにかく、これでフィルターはかけたから、またメールが来たら教えて。もう来ないかもしれないけれど」

息子の言った通り、メールは来なくなった。ドコモから「非通知設定」のお知らせが来ただけになった。

これでようやくメールが使えるようになった。

実は私は、双極性障害という病気があって、同じ病気を持っている人たちの会に入会しようと思ひ、入会申込書にパソコンと携帯のメールアドレスを記入したのだ。それで携帯のメールアドレスが使えないと、困る。また、友達と待ち合わせするときなど、メールアドレスを教えたいし。でも、これでやれやれとなった。

しかし、みんながフィルターをかけたら、迷惑メールで商売している人は困らないか？ 食べていけなくなるのではないか？ 蛇のみちは蛇で、女とHしたくて迷惑メールが迷惑でなくて、それを待っている人もいるのかな？ ことは売買春だけれど。

(8) ゴルフとおせち

私の夫は、ゴルフ好きで、定年退職して以来、三日にあげずゴルフばかりしている。腰痛があって、ゴルフするために、これも三日にあげず、接骨院に通っている。私はゴルフ・ウィドウ(未亡人)であったが、最近は、小説を書くのに忙しく、夫がいないと書くのがはかどるので、それをいいこと幸いにしている。

「あなたもゴルフをすればいいのに」と人が言う。

「なんで私が彼の趣味にあわせなければいけないの？」と聞くと、

「だって、同じ趣味を持ったら、いいじゃない」というわけ。

私は読書と小説創作が趣味。夫は、どだい、本を読まない。夫婦は同じ趣味を持つ必要はなく、全体でなく、一部分でつながっていればいいのだと思う。

私がなぜゴルフをしないかという、スポーツ音痴だからなのだ。学校時代、体育は全くできなくて、運動神経が鈍いので、つらい思いをした。運動会ではいつもビリだった。不器用なのだ。

健康のためには少しは運動をした方がいいので、毎日三十分は歩いている。一時間(朝夕三十分ずつ)歩いていたら、足が痛くなった。で、今は一日に三十分は歩くようにしている。歩くのも遅くて、人がスタスタ歩いて行くのに、いつも追い越されている。だが、競争をしているわけではないから、自分のペースでいいことにしている。競争をすると、いつもビリなので、精神衛生上、よくない。

「ゴルフなど競争する運動は、高血圧によくないんですってね」と私が言うと、夫も、

「ああ、高血圧でゴルフ場で倒れるやつもいるな」と賛成する。

「おれも外で血圧を測ると高いんだな」

「外が寒いからじゃない？」

「そうかな」

私は毎日朝晩血圧を測っているが、ときどき夫も測っている。家で測れば、夫は低いのだ。

ゴルフ突然死というのがあった。ゴルフは楽しいので、つい無理をしてしまい、突然死する。夫の友人の高塚氏など、そうなる可能性が大だ。

夫はゴルフ仲間とメール交換していて、といっても夫はパソコンができないので、私は秘書みたいなことをして、彼の友人たちからのメールをプリントアウトして渡し、返事は彼から聞いて私が送信している。だから彼とゴルフ仲間とのやり取りは私につつぬけなのだ。

高塚氏は、病気で前に入院していた。退院はしたが、膝がいたい、肘が痛い、足が痛い、あそこが痛いここが痛い、いつも言っている。痛くてゴルフができないのに、少し休むとまた無理をしてゴルフをする。調子がいいと、毎日、連チャンでゴルフをする。そして、また病気になる。

「高塚さんは、ゴルフをしなければ健康になれるんじゃない？」

「そうなんだ。でも、ゴルフ以外、することがないんだよ」

することがないって、高塚氏は、小企業の社長で、今は若い人たちに仕事は大部分任せてい

るが、自分が出て行かねばならぬこともあるのだ。先日もマレーシアに仕事で出張し、新年にはタイへゴルフ遠征旅行に行くそうだ。自分が主催して、仲間を連れて行くのだ。

「自分が大将だから、行かなきゃならないんだよ」

「そんなことばかりして、高塚さん、そのうちにゴルフ突然死するんじゃない？」

「それでも本望なんだろう」

「へええ」

「あなたも気をつけたら？」

「おれも、ゴルフで死ねたら、本望だな」

私が小説のためなら命を削ってもいいと思っているのと、同じなのだろう。

競技会で、夫は手ぶらで帰ってくることもあるが、賞品を持ち帰ってきてくれることもある。季節の果物とか、お米やパン、冬には石油ファンヒーター、夏には扇風機、その他いろいろ。優勝の盾などは、飾っておくだけで、実用的でないが。

ゴルフ場の月例大会で、七十一のエイジシュートを獲得した。彼は七十四歳である。私にはどういふことかよくわからないが、「すごいことなんだぞ」と彼は言う。友人たちが集まって、お祝いの会をしてくれた。焼肉パーティである。

仲間の田中女史が、蘭の花かごをくれた。赤やピンクや紫の色とりどりの蘭の花。

「まあ、随分すてきね」

「うん。田中女史は、金持ちで、旦那さんはもう年をとったので、ゴルフはやらないが、自分は車を運転してゴルフを自由にやっているんだ。いい身分なんだよ。ゴルフ場に来る女の人たちは、未亡人とか、そういうのが多いんだな。みんな、楽しくやっているよ」

「そういう人たちのうちに、魅力的な人もいる？」少し愠気がましく聞く。

「いや、みな年寄りだから。若くなければ魅力なんてないよ」ということである。

田中女史には、お礼に、八街の落花生をあげた。値段は、蘭にはとても及ばないが。

暮れに夫はゴルフで優勝し、

「おせち料理、当てたぞ」と言いながら帰ってきた。

「もうおせちは買わなくていいぞ。二万五千元のおせち詰め合わせを当てたんだ」

「まあ」

彼はレストランのおせち申込書を書いている。十二月三十一日に届けてくれるのだ。配達時間は指定できる。

「じゃあ、三十一日の十二時から二時にしてね。その時間、家にいるようにするから」

冷蔵庫に入れるのだから、冷蔵庫の中にあるものを食べつくして、空間を空けておかなければ、とせっせと冷蔵庫の物を食べて、大晦日を待った。

待ちに待った大晦日。

宅配業者は、十二時半に来た。

荷物を空けると、木製の重箱が二つ重ねてある。上は和風のおせち、下は洋風のおせちである。冷蔵庫にしまった。

すこしたって、レストランから電話がかかって来た。

「レストラン・ナルトですが」

「あ、おせちね」

「はい、着きましたでしょうか？」

「はい」

「お空けになりましたか？」

「はい、空けました」

「では、生ものですので、お早くお召し上がりになってください」

「三箇日に食べればいいんでしょ」

「はい」

「どうもありがとうございました」

元日、さっそくおせちを食べる。

「数の子もタコも小さいなあ」と夫が言う。

「こんな小さいものばかり、よく作ったなあ」

お正月料理は一通り入っているが、みな、小さい。二人分らしく、二つずつ入っている。

元旦には和風おせちを食べ、二日には洋風おせちを食べた。二人で二日で食べてしまった。味は濃いかと心配していたのだが、割と薄味でよかった。

(9) 大晦日

二〇一二年が終わろうとしていた。この年は、夫の兄たちも安泰で、まあ、平和だった。

「四人になっちゃったよ。九人いたのに」と長兄は電話で言う。

「今年もいい年でなかったね」

「今年はいいい年でしたよ。一昨年もその前の年も、兄弟が亡くなったけれど、今年はどうなたも亡くならなかったじゃないですか」

夫には二人の姉と六人の兄がいたが、一人の兄は私が夫と結婚する前に亡くなっている。一人の姉とその夫とが二年前に病死した。ついで夫のすぐ上の兄が悪性のガンで亡くなった。一昨年は、独身の兄がマンションで孤独死し、埼玉県にいた兄も交通事故にあって亡くなった。九人兄弟は、次々に鬼籍に入り、残っているのは長姉と長兄と次兄、あと末っ子のわが夫の四人だけである。長兄も次兄も持病を抱えている。長姉は、心臓が悪くて、ペースメーカーを入れている。具合が悪くなると、ペースメーカーが働きだすので、長姉はもう九十代だが、健在である。心臓死でなく、脳死しかないのだ。この長姉は九人兄弟の一番上なのだが、きっと近いうちに、一番上のこの長姉と末っ子のわが夫だけになるだろう。

二〇一二年、長兄の妻が病気になり、寝たきりになった。一時は施設に入っていたが、今は在宅し、介護保険でなんとか面倒をみてもらっている。

「ぼくももう八十九歳で、あとわずかだよ。心臓が痛いし、胃も腸も痛いんだ。耳も遠いし、目は片目だし。病院に行っても、どうにもならないんだ」と長兄はこぼす。

「薬ってないんですか？」

「薬も効かないね。今年はやくもったよ。ダメかと思ったんだけど。あと何ヵ月生きられるか」

「そんな……そんなことおっしゃらないで」

「いや、ほんと。ぼくはいいけれど、後に残される者が心配で」

長兄は以前、家具店を経営していたが、その後、自宅のビルを人に貸して生活して来た。ところが、折からの不況がたたって、事務所を閉める人ばかりで、新しい借り手がない。土地は借地だから、地代は払わなければならない。夫は借地権を売って郊外に移り住めばいいというが、長兄はその踏ん切りがつかない。

「ここにもいつまでいられるかわからないんだ」

「義兄さんと義姉さんとが暮らしていくくらいのはできるでしょ」

「それはできるけれどね、その後どうなるか」

長兄夫妻の一人息子は、ジャズダンスをやっていて、このご時勢、ダンスを習う者もいず、収入がない。孫は三人いるが、上の孫息子は高校を卒業しても、職に就こうとしない。二番目の孫息子は、引きこもりである。末の孫娘だけまともだが、これから大学受験で、金がかかるばかりである。

「孫のことも、心配で心配でしょうがないんだ」

「いままで恵まれすぎてたんですよ。大丈夫、皆、お金がなくなれば働きます」

「働けるかねえ」

「働けなくなったら、国が面倒をみてくれます。いままで、義兄さん、いっぱい税金を払ってきたでしょ。税金で、お孫さんたちは国から生活保護を受けられます」

「そういうこともこれからなくなっていくんじゃないかねえ」

「そんなことはありません」

だいたいこの長兄は、息子や孫を甘やかしてきたのだ。息子は五十代になっても親がかりだし、孫は働かなくても祖父からお小遣いをもらえるし、ビルの家賃で皆のうのうと暮らしてきたのだ。そのビルは老朽化して、彼らに建て替える力もなく、借り手もなく、無収入になろうとしている。

「でも、暗いことばかり考えていてはダメですよ。もうじき新しい年が来ますから、希望を持って生きましょう」

「そうだね。あとどのくらい生きられるかわからないが」

「大丈夫ですよ。百歳まで生きましょう」

二〇一二年はどういう年であったか。夫の兄弟は無事だった。夫には兄姉の他に親戚はほとんどいない。私の親戚は、いとこが一人、亡くなった。

名古屋の姉に、電話してみる。

「新潟の芳ちゃんが亡くなったのよね。妹の達子ちゃんからの喪中ハガキで初めてわかったけれど。あとの人は無事みたいね」

「そう、京子叔母様も無事のようによ」

京子叔母は亡くなった父の妹である。父の兄弟姉妹は京子叔母一人遺してあと、皆、亡くなっている。母の兄弟姉妹も、末の叔母、照子一人遺されている。

「京子叔母様って、不思議な人ね。自分の部屋に閉じこもって、食事も家族と一緒に摂らず、一人で食べて。一日中寝て暮らして。寝たきりになっていると、内臓が老化して、早死にするって話だけれど、京子叔母様は病気にもならず、長生きしているわね。もう九十代でしょ」

「そう、越後の七不思議」

京子叔母は新潟にいる。

「何も悩むことがないから、長生きなのかしら？」

「さあねえ」

また、いろいろと親戚の消息をあれこれ言う。

「もう大晦日ね。長電話止めて、紅白歌合戦でも見たら？」

「私、そういうのは見ない」

「ふうん、じゃ、第九でも聞いて」

「それも聞かない」

「そう」

「小説を書いて過ごす」

「へえ、大晦日も小説書き？」

「新年もね」

「あ、そう」

姉との電話の後、パソコンに向い、小説の続きを書いて、十時に寝に着く。私はどんな日でも、十時には寢床に入る。精神的な病気で、不眠症になったため、規則正しく睡眠をとるよう心がけている。

二〇一三年の年があけた。

正月早々、寝過ごしてしまった。

昨夜用意していたお雑煮を、お餅を焼いて出す。お雑煮に入れるのは、八つ頭とごぼう、絹さやなど。以前は鶏肉を入れていたが、夫がどういうわけか鶏肉入りのお雑煮を嫌がるので、今は入れない。夫と二人、お餅も二つずつ。

「早く神社に行こう」と夫が急がす。

「そんなに急がなくてもいいでしょ。午後からでも」

「早く行かないと、混んじゃうんだ」

「車で行くなら駐車場が混むけれど、歩いていくんだから」

神社は歩いて二十分くらいのところにある。

「干支の置物を買うの？ 今年の干支は、蛇だから、かわいくないわね、蛇なんて」

全く、巳年なので、年賀状の図案にも困ったのだ。

その年賀状は、朝早く、来ていた。皆、巳年の図案に困ったあとが見える。

年賀状は夫婦で百枚出したのだが、出さなかった人からも来た。後で、コンビニから追加の賀状を買って、返事を出そうと思う。年賀状を出したのに、返事をくれない人もいる。年配者などは健在でないのかもしれない。遺族が一言知らせてくれればいいのに、と思う。心配してもしようがない。私も高齢になったので、知人の安否も確かではないのだ。

年賀状を見てから、家を出て神社に向う。

人が大勢出ている。美浜区と国道を隔てた稲毛区の神社である。古い神社だが、海浜ニュータウンができてから、はやるようになった。海浜ニュータウン(美浜区)には神社はない。ここを埋め立てたのは国か、県か、市か、わからないが、とにかくいろいろな施設は作ったが、神社までは作らなかった。そのため、美浜区の人々は皆、この稲毛区の神社に来る。お正月はいつも人の波だ。いつもそうなのだが、今年は特に人が多い。お手水場に人が列をして並んでいるので、手を洗わず、直接本殿へ行く。ここも人の列。そろりそろりと進んで、やっと賽銭箱のところに来た。百円玉を投げ入れようとしたら、夫が十円玉をよこす。「一個だけじゃけちみたいだろ」と言う。で、百十円投げ入れる。

干支の置物を買おうとしたが、小屋の置物の所に売り子がいない。例年なら巫女の衣装を着た若い女性が大勢いるのだが、今年は男性がちらほらいるだけである。「すみませーん」と声をかけても、来ない。「ちょっとお待ちください」と言うばかり。待たされて、やっと買った。

「これなら、黙って持っていってもわからないな」と夫が言う。

「そう思ったけれど、神社から万引きしたら罰があたりそうだから」

とにかく千円で置物を買った。

「蛇みたいでないな」と夫が言う。丸っこくて、去年の辰に似ている。

「ここは海浜ニュータウンのおかげではやっってはやっけて笑いが止まらないだろうな。宗教法人は税金を払わなくていいし」

「そうね」

「税金を取ればいいんだな。個人からは取るのかな？」

「個人って、宗教法人に勤めている人のこと？」

「そう」

「勤めている人からは取るんじゃない？ わからないけれど」

「今度インターネットで調べておけよ」

「そんなの、どうやって調べるのか、わからない」

ヤフーの質問サイトにでも聞くのかな？

暮れはあまり天気がよくなかったが、お正月はずっと晴れていた。

二日、三日は、夫は例年通りゴルフに行く。私はビデオなど見て、のうのうとしていた。一人でいるとき、お餅を食べても大丈夫か？ お餅が喉に絡まっても、助けてくれる人がいない。でも、食べたいので、少しずつ、ゆっくり食べる。

ずっと銀行も郵便局も休業していたので、四日に、出かけた。郵便局に振替が三個も溜まっている。それをしなければならぬし、お金もないので、銀行のキャッシュコーナーへも行く。実は、私は、夫に一月分のお小遣いを渡すのを忘れていて、彼に催促されたのだ。お金を引き出し、月末の記帳もする。公共料金など自動振替になっている分がいっぱいあるのだ。今日から銀行も始まりなので、キャッシュコーナーも混んでいた。

銀行の隣のスーパーに寄って、いちごやみかんなどをかう。シジミも買ったかったが、海産物はまだ品物がそろっていなかった。

五日、図書館の仕事始め。夫に車を出してもらって、近くの図書館へ行く。返す本がいっぱいあったので、歩いて持つていくには重かったのだ。また、新しい本も借りてくる。

夫のよく行く接骨院は、月曜の七日から始まる。さっそく彼は出かけて行って、新情報を仕入れてきた。

「マンションの下に大手のSスーパーができるそうだ」

「マンションってどこの？」

「決まっているじゃないか」

「陸橋脇の今ショッピングセンターのある土地に建つマンション？」

「そう。あそこの土地は駐車場も含めて、広いから、マンションもいっぱい建つだろう。スーパーの一つも作らなければ、マンションも売れないだろう」

「これからショッピングセンターを壊して、マンションを建てて、売るって、消費税が上がる前に間に合うのかしら？」

「急がないと間に合わないな」

「でも、計画ができれば、建築が終わらなくても売れるものね」

「そう。でも、売れるのかなあ？ 　ここら辺、マンションがいっぱいできたが」

「みんな売れているみたいね。ここは売れるわよ。千葉から遠くになれば別だけれど、この辺は交通の便がいいから」

人口が多くなるのは喜ばしい。大手のスーパーもできれば、買い物難民だったのも解消する。
あと、一、二年の辛抱だ。

(11) ウィンドウズ8

作家たちは、今は皆、パソコンで小説を書いている。原稿用紙にペン書きしているのは、ごく少数の変わり者たちだけらしい。できた小説もメールで送れば、いちいち編集者に取りにきてもらわなくてもいい。家の中も散らかしほうだい掃除しなくてもいいわけだ。私も来客は好きだが、掃除しなくてはならないのは困る。

作家の中には、原稿用紙に書いて、それをワープロやパソコンで清書している人がいるそうだが、それはワープロやパソコンの性能を知らないのだ。何を隠そう、私も以前はそうしていた。直しているうちに原稿用紙は汚くなるから、パソコンで清書する。始めからパソコンで打てばいいのだ。直しはいくらでも効く。いくらでも好きなように直せるから、自分の持っている力の120%くらいの作品ができる。できあがったものはきれいだから、編集者に喜ばれる。ただ、パソコンで書くようになってから、私は漢字の読みはできても、書くのはできなくなった。計算機ができて、暗算も筆算もできなくなったのと同じである。

十数年前、私はウィンドウズ98というパソコンを買った。随分便利なものだったが、フリーズすることが多くて、困り者だった。数年たったら、年がら年中故障するようになった。で、ウィンドウズXPに買い替えた。これは始め、フリーズもせず、とても快適に使いこなせた。素敵な機械で、気に入っていたのだが、六年も七年もたつうちには、入っているデータが多くなり、重くなった。起動が遅く、メールからのリンクもあまりできなくなった。

「お母さん、こんな遅い機械、買い替えたほうがいいよ」と息子が言う。「いらいらしてくるよ、まったく」インターネットがなかなかつながらないのだ。

そうこうしているうちに、新しいウィンドウズ8が発売になった。さっそく買おうと思ったが、息子が「今、ウィンドウズ8を買った人たちは、トラブルにあって困っているよ。一番最初の出荷分なんか買わないほうがいいよ」と言う。「それに、今、年末で物価が高いよ。一月が過ぎて、二月頃になると、物が売れなくて、安くなるんだ」とか。

今書いている小説が完成したら、パソコンを買い替えようかと思った。しかし、なかなか思うように完成しない。それに、電器店の「ウィンドウズ8 合格の道しるべ」というソフトを買って、勉強していたら、早く8がほしくなった。息子も、「二月中に買わないと、また高くなるよ。三月は新年度だから、皆が新しく買うんだ」と言う。

私は書きかけの小説を、外付ハードディスクに入れて、息子と電器店に行った。五万円で安く買ったが、電器店の店員は何も知らないのだ。安い機種はタッチ操作ができなくて、マウスで操作するほかないのに、私は知らなかった。店員も教えてくれない。安いのを売ればいいと思っている。後の祭りで、損をした。

パソコンの設定は、息子がメーカーに電話しながら、やってくれた。オフィス2010をオフィス2013にバージョンアップするのも、メールの設定も、セキュリティーの設定も、電話しながらやってくれた。「おれの友達に、8を使っている奴はいないからなあ。みんな、XPを使っているから、聞けないんだ」という。息子がやってくれたのに、私は疲れてしまった。

新しい機械は、なじみがなくて、何が何だかわからない。息子が帰った後、旅行先の天気予報を見ようとしたら、おかしなソフトをダウンロードしてしまい、まったく何が何だかわからない状態になった。メーカーに電話したら、そういうソフトは悪いものなんだそうで、復元状態に戻すよう、指示してくれた。油断も隙もありはしない。

メールを見るのも、インターネットするのも、機械が複雑で、よくできない。説明書に出ているタッチ操作ができないのも、いらいらする。「ウィンドウズ8 合格の道しるべ」も、一ヵ月間しか見られないのに、よくわからない。機械に振り回されて、心の平静を失ってしまった。

「お母さん、医者へ行ったほうがいいぞ」と夫が心配する。

「あまり夢中になるなよ。病気になるぞ」

「夢中になるなって、あなただって、ゴルフに夢中になっているじゃない」

「おれは病気にならない。お母さんは、ガラスの頭なんだから、注意しなければいけないんだ。いつもそれで失敗しているじゃないか」

ガラスの頭.....壊れやすい頭。ちょっと興奮すると、躁病になってしまう。眠れなくなる。今回は、まったく眠れないわけではないが、早朝に目が覚めてしまい、朝うとうとしていることもできず、四時ごろに起きてしまう。

「早く入院したほうがいいぞ」

「入院って、そこまで必要はないでしょう。明日は、病院に行きますよ。ちょうど薬をもらいに行く日だから」

「おれも行こうか」

「なんで？ 先生に言うことがあるの？ あるなら一緒に来ればいいし、そうでないならついてきてもらわなくてもいいわよ」

「自分一人で行けるならいいよ」

私はウィンドウズ8のおかげで、興奮してしまったのだった。双極性障害という病気は、治っていない。

ともあれ、翌日、病院に出かけた。いつもより早く行ったのに、もうずっと前から来ている人たちがいて、順番待ちだった。私は、軽躁か、軽うつか、いや、その混合状態なのではないか？

「1ヵ月ぶりですね。どうですか？ 状態は？」

「それがよくないんです。軽躁と軽うつ混合状態なんです。早朝目が覚めてしまうし、興奮しているし、パソコンを買い替えたからなんです。きっかけは、ウィンドウズ8にあるんです」

「不安なんですね。混合状態というより。夜寝る前の薬を増やしておきましょう。それで一週間後にまたきてください。一週間、ウィンドウズ8には触れないでおきましょう」

「だって、先生、それではメールがたまっちゃうんです」

「じゃあ、どうしたいんですか？」

「お薬をもっと増やしていただきたいんです」

「お薬を増やせば、副作用も強くなりますよ。一週間、ウィンドウズ8には触れないで、我慢してください。来週、また来てください」

やれやれであった。

一週間分薬をもらって、家に帰り着いた。軽躁と軽うつ混合状態は終わっていた。さすがに先生は、精神科の専門医だと思った。ただ、不安は強かった。

それから一週間、夜の薬が増えたため、寝つきはよくなったが、あいかわらず、早朝覚醒が続く。夫が何も言わないのが、ありがたかった。朝まだ暗いうちに起きて、血圧をはかり、朝ごはんの支度をして食べ、本を読んでいた。私は本が読めるうちは、大丈夫なのだ。躁病になると、あの本がほしい、この本がほしいと、どんどん本を買うが、読むことはできなくなるのだ。今度はそういうことはなかった。

先生に言われたので、ウィンドウズ8にはできるだけ触れないでいた。しかし、メールが百通も二百通もたまってしまうのは恐ろしいので、メールチェックだけはした。いつも二泊三日旅行に行っているとき、その間にメールがたまってしまうので、困っていたのだ。今度は一週間だから、恐ろしい。で、メールチェックだけは勘弁してもらおう。

一週間、ぼけっと暮らしたので、気持ちは落ち着いてきた。だが、早朝覚醒が続くのはあいかわらずだ。

一週間後、また病院へ行く。

「気持ちは落ち着いてきたんです。でも、やはり、朝四時頃に目が覚めてしまって」

「そうですか。まだ寝る前の薬を多くしておいたほうがいいでしょう。今度は三週間後に来てください」

一応、無罪放免である。精神科医はプロだから、患者の声の調子で躁かうつか何でもないかわかるらしい。

私は三日後に夫と旅行に行く予定があったが、今旅行してもいいかどうか先生に聞くのはやめておいた。旅行はやめなさいと言われると残念なので。

ウィンドウズ8は再開した。方法がわからなくて、いろいろ電話して聞いたりした。電話してもつながらないのは、外付ハードディスクの会社で、エラーメッセージが出るのだが、前に私がXPから入れておいたドキュメントは、全部、取り込めた。エラーメッセージは無視してもいいか？ もう一つ不思議なのは、ワード2003で作ったドキュメントなのに、ワード2010と出てくるのだ。新しくドキュメントを作るワードは、2013になっている。わからないことがあるといけないから、2010と2013のマニュアルは、両方とも買った。しかし、マニュアルに出ていないことも多い。マイクロソフト社に無料で聞けるのは、九十日間だけなので、あとはマニュアルの会社の電話サポートを利用するしかない。

それにしても、軽躁状態になりそうだったのに、危機が脱出できて、ほんとうによかった。

(12) 飛行機事故

二月末、私たち夫婦は、かねての予定通り、安芸の宮島に向けて出発した。厳島神社にお参りし、岩国の錦帯橋、萩、津和野を巡る旅である。広島まで飛行機で往復する。飛行機は新幹線より早い、やはり怖い。

「私たちが帰らなかったら、倉庫の中に家の鍵が入っているから、それであけてね」と息子に電話したら、

「お母さん、飛行機に乗るくらいでそんなに心配しなくていいよ」と笑われた。

飛行機に乗るのは、これで二度目である。去年、四国の高松空港まで往復した。その時はなんでもなかったから、今度もなんでもないだろう。神経質になるのはよそう、と思うのだが、なかなか理屈通りにいかない。

新人賞の応募作品二つそれぞれ違うのを、別々の出版社に送った。締め切りはどちらも三月末だが、私が飛行機事故で亡くなっても、新人賞に当選すれば作品が世に残るかもしれない、などと考えた。それとも、締め切りよりずっと早く到着した原稿は、出版社がなくなってしまうだろうか？ それも不安だが。

さて、その飛行機の旅。行きはとても快適だった。空の上から富士山が見えた。

「飛行機から富士山って、なかなか見られないんだよ」と夫が言う。「おれは、現役の時、毎月愛媛まで行っていたが、富士山は見られなかった」

十五分遅れで広島空港に到着。若い女性の添乗員が出迎えてくれた。そして、バスで宮島へ行く。宮島口から船で島へ渡る。赤い大鳥居は、砂浜に建っていた。奈良公園と同じく、鹿がいる。自由散策して、土産物屋に集まる。そこで土産や自家用の食品を買った。レストランでは、焼き牡蠣とアナゴ寿司が出た。

また船で宮島口に戻り、ここで一つミスをした。

「まっすぐ行ってください。バスが待っていますから」と添乗員が言うので、まっすぐ歩いたが、どこにもバスなどない。夫と二人、迷子になってしまった。

「ホテルの名前はわかっているのよ。そこまでタクシーで行けば」と私は言ったが、夫は「しかし、みんな、待っているだろう」と言う。

元の所に戻ったら、運転手と添乗員が待っていた。何のことはない、「右へまっすぐ行ってください」と言えばいいものを、ただ「まっすぐ行ってください」と言うものだから、右へ曲がらなかったのだ。皆に合流できてよかった。

夜、ホテルから船が出た。船に乗って、赤い鳥居まで行く。満潮なので、鳥居は海に浮かび、その下を船で潜り抜けることができるそうだ。

海の中の鳥居は、大きかった。岸の方々がライトアップされて、見事だった。この大鳥居は、海の下に掘って建ててあるのではなく、重さで海に浮かんでいるのだそうだ。何百年間も一定の場所に浮かんでいるなんて、不思議だ。赤、というより、朱色というべきか。これだけでも旅行に来たかいがあった。

「寒いわね」

「寒いねえ」

千葉より南のほうに来たわけなのに、なぜか寒い。

お風呂に入る。宮島は温泉か？ 温泉ではないかもしれない。お風呂の湯船が、東北地方と違って、浅いので、足をのばして体をゆっくり温めることができた。髪も洗った。

その夜はぐっすり眠って朝を迎えることができた。早朝覚醒はしなかった。

次の朝、岩国の錦帯橋へ。橋を渡るのに、料金がいる。丸くなった五連の橋である。橋を渡ると、公園になっていた。白い蛇がいるという話だが、蛇なんか見たくないなので、探さなかった。

次は、秋芳洞へ。一時間も歩くので、足に自信のない人はバスで待っていてくださいと言われた。

「お母さん、大丈夫か？」夫が心配する。私も不安だったが、無事、歩けた。洞窟の中は不思議な世界だった。歩いてよかった。洞窟を出てから、レストランへ行き、オプションのアナゴそばを食べる。

そして、長州藩の有名な萩へ。幕末の志士たちゆかりの家々を見物する。古い家を維持するのも大変だろうと思う。夏みかんがなっていた。明治の頃は、人々が夏みかんで生計をたてていたそうだ。今は甘夏やはっさくが主流だが。

高杉晋作の銅像はできたばかりだそうだ。萩城を向いて立っているという。

萩焼会館を見て、旅館へ。ここは、昨日と違って、日本式の旅館だった。私は洋式のほうがよかったけれど。

夕食はフグ料理だった。今は、フグの毒は出荷段階から抜いてあるから、たとえ素人が料理しても、中毒はしないそうだ。

畳に正座して食べるので、夫は足のしびれが切れたようだ。早々と部屋へ帰る。ここは温泉だった。

第三日目は島根県の津和野へ行く。天気予報では津和野は雪が降るということだったが、そんなこともなく、晴れていた。堀に大きな鯉がいっぱい泳いでいた。鯉が津和野の名物らしい。お土産屋で、抹茶とお菓子をいただく。これもオプションである。

あとは、バスで広島へ。お弁当はバスの中で食べる。

昼過ぎに広島の平和記念公園に着いた。原爆ドームや禎子の像を見て、原爆資料館へ入る。入場料は一人五十円だから、皆に見てもらいたくて、安く設定しているのだろう。原爆の写真、被爆した物……中に、被爆地をさまよう人々の姿が作られていて、ぼろぼろの着物で手を下に下げてさまよう……幽霊のよう。恐ろしい。これが現実だったのだ。広島の地獄を展示している。死んでから人々は地獄に行くのではない。地獄は、現にここにあったのだ。涙が出て止まらなかった。

あと、広島空港へ。空港への道が長かった。

添乗員から航空券を受けとり、ここで解散する。

一時間以上もあったが、他にすることもないので、受付へ行く。待合室で待つ。

ところが、時間が来ても、日本航空の搭乗手続きが始まらない。機体の点検をしているので、

しばらくお待ちくださいとアナウンスがある。ときどきアナウンスがあつて、いつまでも機体の点検をしている。

予定時刻を大幅に過ぎて、なんと「エンジントラブルのため、このフライトは中止となりました」と言う。他の便に振り替えて帰らなければならない。搭乗口に並んでいた人たちは、早い全日空の便で帰ったらしい。

「私たち、どうなるの？」

「次の便に振り替えてくれるさ」

「空席がなかったら、どうなるの？」

「広島に一泊するんだな。日本航空が責任をもって宿泊料は出してくれるさ」

「そう……」

「しかし、おれは毎月飛行機に乗っていたのに、こんなことは始めてだな。アメリカへ行ったときは、途中で飛行機が引き返して成田に一泊したが」

「珍しいことなの」

「うん」

「でも、よかったわね。乗ってから途中でのエンジントラブルでなくて」

飛行中の事故だったら、命がなかったのだ。

アナウンスがあつた。「H旅行社の安芸の宮島見学の御一行様は、十七時四十五分の便に振り替えさせていただきますので、搭乗口Bまでおこしてください」

「今、何時？」

「ちょうど十七時」

「じゃあ、それで行こう」

「お好み焼きでも食べる？」

「うん」

空港のコンビニで売っているインスタントのお好み焼きを食べる。それが、塩辛くて食べるのがせつなかつた。

振り替えてもらった飛行機も、十五分も遅れてやっと出発した。やれやれ、今度は間違いなく羽田に着くんだろうか……と心配だった。窓際の席ではなかつたし、夜も暗くて、何も見えなかつた。着陸する時、耳がおかしくなつた。

ようやく羽田に着いて、モノレールからJRに乗り継いで、稲毛に着く。タクシーで帰ろうかと思つたが、大きなカバンを持っているので、タクシーは難しい、バスで行こう、と夫が言うので、その通りにする。ようやく家に着く。

荷物を片付けて、寝に着く。翌朝も早朝目が覚めた。旅行中は早朝覚醒はなかつたのに、またもとに戻ってしまった。私は早朝目が覚めるのが何日も続いて、その後、お寝坊さんに返るのだ。もちろん、最悪の場合は、早朝覚醒が続いて躁病になる。それはめつたにないことだが。今度は大丈夫だろう。

旅先の新聞で、「小学生のみなさんへ」で始まる「はだしのゲン わたしの遺書」（中沢啓

次著)の書評を見た。図書館に注文しようかと思ったが、注文が殺到してなかなか番が来そうにないので、自分で買うことにした。息子にも読ませようと思う。

「はだしのゲン」全十巻が発売になった時、息子たち小学生は図書室から争って借りて読んだ。早く手に入れようと、走って図書室に行くのだ。間に合わなかったときは、私からお金をもらって本屋へ買いに行った。原爆の悲惨さの中にも希望の見える良い漫画だった。私も息子から借りて読んだのだ。

その中沢氏は、去年十二月、肺がんのため亡くなった。被爆者なのに七十三歳まで生きられてよかったじゃないか、と息子は言うが、この人の人生は原爆症との戦いの日々だったのだ。苦しきただろうと思う。

彼は、「はだしのゲン」は自分の遺書であるという。皆に読み継がれ、世界中の子供たちに読み継がれてよかったと思う。でも、彼は続きの第三部まで書きたかったのだ。ゲンをチェルノブイリまで行かせたかったのだ。白内障のため、漫画が描けなくなって、それを断念せざるを得なかった。

私の遺書は何だろう、と考えてみる。

これまで何度も死地を潜り抜けてきた。今度の飛行機事故もそうだ。もしあれに乗っていたら、命はなかったのだ。そのほか、私は昭和十八年生まれなので、空襲にあい、逃げた新潟で第三番目の原爆にあうはずだった。当時、新潟は、原爆投下予定地だったのだ。原爆が投下される前に戦争が終わった。

死地は他にもあった。幼い頃、肺炎で高熱にうなされたし、長じてからはがんの手術もしなければならなかった。交通事故にあいそうになったことも何度もある。双極性障害という病気になったので、藪医者に酷い注射をされ、意識を失って、生死の境をさまよったこともある。それでも、死ななかつた。

幼い頃、母に、新潟には原爆が落ちるはずだったんだよと教えられ、幼心に私は悩んだ。なんで私は死ななかつたのか。私を生きのびさせて、神様は私に何をさせようとなさったのか。無神論者の私が、そのことでは神様を信じて、神の意志を考えさせた。

今も、あわや飛行機事故にあうところを、神様に助けてもらい、悩んでいる。私は何をすべきか。

平和である。この日本の平和、世界の平和のため、私にできることをやっいていこう。ときあたかも、国境の島をめぐる、隣国と争っているのだ。戦争をしてはいけない。争いごとをしてはいけない。再び日本を戦火に巻き込んではいならない。そのことを、各地で訴えていこう。

私の平和とは、何か。何事もない、静かな毎日を、日常生活を、ここに書き込んだつもりである。

私の平和

<http://p.booklog.jp/book/78690>

著者：小城ゆり子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/youko103/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78690>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78690>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ